

真珠のネックレス

karinomaki

真珠のネックレス

一人の小さな女の子の話です。

女の子は両親と死に別れ、祖父とともに住んでいました。祖父は、小さな真珠のネックレスを女の子にわたして言いました。「これは、君のお母さんの形見だよ。お母さんを思い出して悲しくなったら、この中にお母さんがいると思って元気を出すといい。もちろんお父さんも一緒だよ。」

女の子は言いました。「どうしてこんな小さな粒にお母さんとお父さんが入れるの？」

祖父は言いました。「心というものは、無限なんだ。でも、どんなに小さい物にも、大きな希望をたくせる。心は目にみえないからこそ、あらゆる可能性を持っているんだよ。」

女の子に、この意味はわかりませんでした。そのネックレスが特別なものであることはわかったのです。

物と精神

私はいつも、物と精神の関係を考えながら生きています。精神は物から流れ、物にかえってくる・・・そんな気がするので、このことを分析してみようと思いました。そして、一つの言葉と出会いました。「カントは哲学の貯水池」という言葉です。これは、カント以前の哲学はカントに流れこみ、カント以降の哲学はカントを源流にしているという意味です。カント哲学の中でも、この言葉どおりの循環が書かれていると思います。カントが追求した「形而上学」という、形のない、目に見えない力（天と地を貫く力）は、きっと貯水池の水のように、美しく世界を循環しているのです。精神（心）は、目にみえないからこそ、あらゆる可能性を持っていて、無限である・・・しかし、精神だけが大切なら、どうして人は物質界に生まれたのでしょうか。それは、大切な精神を、神が物の中に隠してしまったからです。そうは言っても、物は物であり、精神を持つはずなどないと、普通は考えるでしょう。精神を持っていると思えるのは、データのたくさんつまったパソコンや、CDくらいだと思うかもしれません。

女の子の祖父は、女の子に、物の奥底の精神の存在を教えたいようです。「心というものは、無限なんだ。でも、どんなに小さい物にも、大きな希望をたくせる。心は目に見えないからこそ、あらゆる可能性を持っているんだよ。」と女の子に言いました。

「信じる」ということは、とても大切なのです。物は物でしかない・・・と考えると、決して説明できないことが出てきます。それは、肉体と魂の関係です。デカルトは物心二元論を説きましたが、この、肉体と魂の関係を説明できませんでした。物と心を完全に分けてしまったからです。では、本当に物の中に精神が溶け込むことができるのかと言われれば、それも難しそうです。それならどうすれば物と精神、そして、肉体と魂を溶け合わせることができるのでしょうか。これができれば、そして、この二つのうちの、魂、精神の優位を証明できれば、魂（精神）は肉体の中に一度入ることで、永遠の循環を手に入れるという、不思議なサイクルが説明できそうです。この世界という物質界に生まれたことで、永遠の循環が可能になるということです。

カント

花は、種が育って上へのびてから開き、しかし、天上へのぼってしまうことなく枯れ、種をつくり、地面におとします。この循環は、たいへん美しい、宇宙の秩序です。この秩序を書くということが、哲学の大きな喜びだと思えます。

この物質界で、種という「物」を植えて初めて、永遠の美である花が咲き、再び種を作ってまた芽生えるという、永遠がつくられるのです。

このことを、カントの哲学から読み取ってみると、カントは物質界の中の認識を、純粹理性批判で書きました。しかし、叡智界である、精神世界の優位を実践理性批判で書いています。そして、カントは叡智界へと人が突き抜けていこうとすると、アンチノミー（二律背反）という矛盾が生じるとしています。つまり、生きている限り、永遠に咲く花をつくることはできないのです。それでも人は、心のどこかで永遠を知っています。この、物の世界の中で、ずっと続いていくものを信じるために、人を愛するたびに永遠を信じ、永遠に命が続くことを願うのではないのでしょうか。永遠を信じるということが、希望だからです。毎年、桜が咲いて、散っていくのを見て、私ははかない中にも永遠を感じます。桜は美によって、永遠の春をめぐっていくのです。空に向けて咲き、地に散って枯れ、そのサイクルによって永遠の美を人に伝えるのです。この世界で人が行っている営みも、繰り返しのようであり、永遠の循環なのです。そのことを女の子が学んでいく過程を書いていきたいと思えます。

部屋を片付ける

女の子はとてものがさつで、整理整頓が苦手でした。ある時、女の子はめちゃくちゃな部屋の中で、ネックレスを失くしてしまいました。お風呂に入る時にはずしたのですが、どこに置いたのか思い出せません。女の子は祖父に、失くしたことを言えずに、数日がたちました。祖父はある日、言いました。「君はネックレスをするのをやめてしまったのかい？」

女の子は恥ずかしそうに言いました。「部屋の中で失くしてしまっただけ。部屋を片付けられなくて、探すこともできません。」

てっきり祖父に怒られると思っていったのですが、祖父は怒らず、女の子に言ったのです。

「私が悪かった。君に部屋の片付け方を教えないといけなかったのだね。もう少し大きくなったら片付けるだろうと思っていたが、大切なものを失くしたのなら、ぜひ教えないといけないね。」

女の子は、本当に祖父が片付け方を全て教えてくれると思い、わくわくしたのですが・・・
祖父はこう言っただけでした。

「物を大切だと心から思っごらん。そうすると、物がどこに片付けてほしいか、教えてくれるよ。」

女の子は、部屋を片付けようとして、物をじっと見ていました。しかし、祖父が言ったように物の声を聞くことなど、できませんでした。女の子はいらいらして、祖父に言いました。

「おじいさん、片付けられないよ。もうあのネックレスはいらない。もっと大切なものを新しく買うからいいの。」

祖父は言いました。「君は大切なことを忘れてるよ。君が大切なのはネックレスではないだろう。お父さんとお母さんの思い出だろう。大切な両親の思い出は、君がお部屋をきれいにしたら、君の心の真ん中に、もっと大きくなってかえってくるよ。その時、絶対にネックレスは見つかっている。それは、心を、お部屋をきれいにしたら、その原点に・・・心の真ん中に、いちばん大切なものが『きれいな場所だから戻ってこよう』と思ってくれるからなんだ。もし、本当に失くしたのなら、私が新しいのを買ってあげるよ。本当に失くした時だけ、他のもので埋め合わされるのだ。でも、とにかく、部屋を片付けてごらん。」

痛みの中の光

ここで、祖父が言いたかったことは、「原点にかえる」ということなのです。心の真ん中に何があるのか・・・いちばん大切なものは何なのかを知っていると、その心の軸が、不思議な引力を持って、ばらばらになっているものをつなぐのです。祖父は、女の子がまだ小さく、父母を恋しがっていることを知っていました。そのことを乗り越えるのではなく、心の軸にすることで大きな守護力を女の子が引き出していくことを望んでいました。祖父は、女の子にとって、両親を失ったことが大きな傷であると知っていました。しかし、その傷を完全に癒すことはできないとわかっていたのです。では、祖父は「痛み」を軸にしないで女の子に教えているのでしょうか。残酷なことかもしれませんが、そうなのかもしれません。その女の子に限らず、この世界で生きている限り、痛みから完全に逃れることはできないのです。だから人は無意識に楽しいことばかりにふけて痛みを忘れて生きようとしみます。それは前向きな生き方ではありません。それでは、この世界でどう生きたらよいのでしょうか。苦しみながら生きよと神は思っているのでしょうか。

そうではなく、「君はどうやって痛みの中から光を取り出すのか？」という課題を神は人に与えているのです。

悲しい記憶

女の子は、祖父の言ったことを思い返して、部屋の中でじっとしていました。祖父は、「両親の思い出は、部屋をきれいにしたら、心の真ん中に、もっと大きくなってかえってくるよ。」と言いました。女の子は、その意味を考えていて、はっとしました。「私はお父さんとお母さんのことを思い出すのがつらくて、思い出にふたをしていた。」と思ったのです。両親がいたころ、お母さんが部屋を片付けていたので、いつも部屋はきれいでした。女の子は散らかっていく部屋の中で、昔の記憶に覆いをかぶせていったのです。

安らぎ

この世界の物の中にはたくさんのとげがあります。そのとげとは、「むなしい」というとげです。物は物でしかない。何も助けてくれないというむなしさを感じたことのない人はいないと思います。しかし、そのとげを大きな柱に変える、不思議な引力があるのです。それが、「心の真ん中にある、いちばん大切なもの」と、祖父が表現したものなのです。しかし、それは痛いものなのです。痛いからこそ、むなしさのとげを集めてくれて、大きな生きる柱にかえてくれるのです。このことを、女の子の話でわかりやすく書いてみます。

女の子は、まだ小さいのに、大きな宝をつかみました。痛みにふたをしないで、それを大きく包み込むとき、初めて、ちゃんと真面目に生きようと思えることです。女の子は両親の優しい思い出にまで、悲しいからといってふたをしていました。しかし、その悲しみの中に、「お父さんとお母さんの分までしっかり生きてね。悲しいけど、その悲しみが逆に、しっかり生きる強さになるんだよ。」という深いメッセージがあるとわかったのです。悲しみは、大きく包み込み、安らぎにかわる時、この世界の物に命を吹き込む。その時、この世はむなしいものではなくなるのです。

女の子は、いつも部屋をきれいに片付けていたお母さんを思い出しました。すると、その時部屋にいた女の子は、部屋の中の一つ一つの物たちが、美しく整頓してほしいとあって待っているのがわかりました。祖父が言ってくれたように、物がどこに片付けてほしいか教えてくれる気がしたのです。

世界と永遠

この世界がむなしいものなのか、それとも、一つ一つの物の中に、大きな救いを感じることできる、生きがいのある世界なのか・・・それは、物と向き合うことによって永遠の循環を見出すことができるかにかかっています。そのかぎは、悲しみの中から光を取り出す力です。悲しみのくれたメッセージを読み取る力をつくるために、私達は物ばかりのむなしい世界に生まれたのだと思います。

女の子は、真珠のネックレスのネックレスを見つけることができました。その時、一度価値を見失っていたそのネックレスの中に、再び美しい力がかえってきた気がしました。目に見えない力は世界を循環して、この世界の中にも永遠を作っているのです。